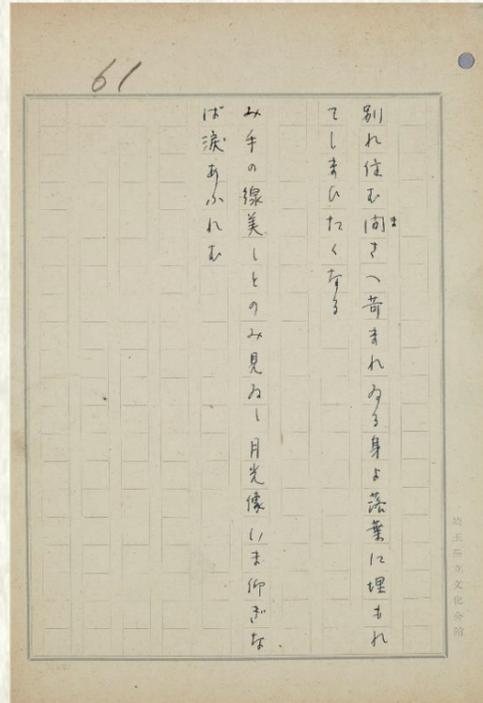


4 月光菩薩のうた

民子は、仏像を美術品として鑑賞していただけでなく、心の支えとしてもとらえていたようです。第一歌集『まぼろしの椅子』では、ある画家に「仏像は信仰よりも美の対象である」と言われ、^{いさどお}憤りを覚えた、という内容の歌が詠まれています。

民子が強く心惹かれた東大寺三月堂の月光菩薩は、^{とうだいじさんがつどう がっこうぼさつ}『まぼろしの椅子』や、民子の最後の歌集『風の曼陀羅』^{まんだら}などで詠まれています。ここでは民子が歌を詠んだ時期によって、仏に対する心境が変化したことも伺えます。『まぼろしの椅子』では、美しい手の線のみ注目していた月光像を、今見れば涙が溢れるだろうと心の動揺を詠んでいるのに対し、『風の曼陀羅』では、慈悲深い月光像に対して自分は「我儘な女に過ぎなかった」と、おだやかに過去を見つめる歌を詠んでいます。



自筆原稿「み手の線 美しとのみ 見みし月光像
いま仰ぎなば 涙あふれむ」(No.16)



写真「白杵磨崖仏」 所蔵アルバムより

参考文献

- 『私の短歌入門』山本雄一/編 有斐閣 1977年
- 『埼玉の寺-写真紀行-2』秋山喜久夫/文 埼玉新聞社 1981年
- 『自解100歌選 大西民子集』大西民子/著 牧羊社 1986年
- 『回想の大西民子』北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
- 『まぼろしは見えなかった』さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年
- 『全円の歌人-大西民子論-』沖ななも/著 角川文化振興財団 2020年

2021.1.7 発行
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1
電話 048-643-3701

企画展 民子の心を支えたもの

—奈良・寺・仏—



2021年1月7日(木)~2月23日(火)

1	写真	伎芸天
2	手作り歌集	「一切の 藝術守護の 女神とふ 伎藝天女を 慕ひ来にけり」 【展示期間:2021年1月7日~1月31日】
3	手作り歌集	「薬師寺に かよふ道べに ひるたけて つまくれなみの 花は咲くなり」 【展示期間:2021年2月1日~2月23日】
4	手作り歌集	「石塔の 苔むしたりて そびえたり 冬陽だまりに さぶしや般若寺」
5	書籍	「カレンダーに しるし置きしが 今朝見れば 唐招提寺の 祭りもすぎぬ」 『印度の果実』より
6	写真	奈良女子高等師範学校時代の民子
7	ノート	奈良女子高等師範学校に提出したレポート
8	自筆色紙	「完きは 一つとてなき 阿羅漢の わらわらとたち あがる夜なきや」
9	自筆原稿	「累代の 領主の墓の しづもりを ほぐさむと来て 小綬鶏の鳴く」
10	アルバム	「宿房に だいだい色の 灯はともる 雪ふかぶかと あはれ夕昏れ」 民子所蔵アルバムより
11	自筆原稿	「旅の歌」(雑誌「形成」1975年1月号掲載)
12	雑誌	「形成」1975年1月号
13	アルバム	白杵磨崖仏
14	仏頭	白杵磨崖仏
15	自筆原稿	「仏像は 信仰よりも 美の対象と 言へる画家を われは憎みき」
16	自筆原稿	「み手の 線美しとのみ 見みし月光像 いま仰ぎなば 涙あふれむ」
17	自筆原稿	「移り来し 部屋にかかぐる 月光像 いくばか更へて ゆかむ生活も」
18	自筆原稿	「ふくらかに 脇侍は双手 合はせおり われは自儘な 女に過ぎず」

所蔵は全て、大宮図書館です

1 仏との出会い

大西民子は17歳から20歳まで、両親の住む岩手県を離れ、奈良女子高等師範学校に通いました。古都・奈良に住むことで、多くの寺や御仏たちに出会い、民子の詠む歌にもしばしば登場することになります。

民子が楽しみにしていた日曜日の仏像巡りの中で、もっとも心惹かれたのが、^{あきしのてら}秋篠寺の^{ぎけいてん}伎芸天でした。民子は、その美しさを歌に詠んでいます。

「一切の 藝術守護の 女神とふ 伎藝天女を 慕ひ来にけり」

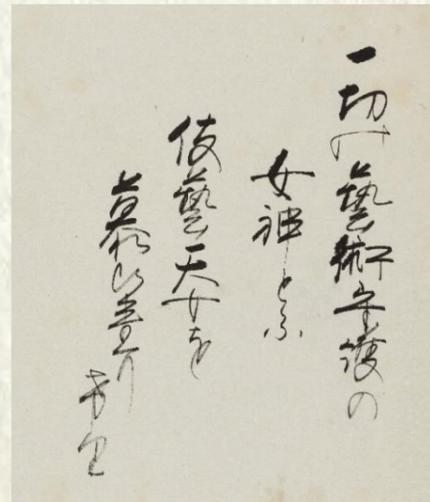
また薬師寺や般若寺を訪れた時のことも歌にしています。

「^{やくしじ}薬師寺に かよふ道べに ひるたけて つまくれなみの 花は咲くなり」

「^{はんにやじ}石塔の 苔むしたりて そびえたり冬陽だまりに さぶしや般若寺」



手作り歌集『はつあきの歌』1943年刊
(No.2・3)



手作り歌集『はつあきの歌』より
「一切の 藝術守護の 女神とふ
伎藝天女を 慕ひ来にけり」(No.2)

2 奈良への思い

勉強に勤しみながらも歌を詠み、休日には仏像巡りを楽しんだ奈良の学生時代は、民子にとってもっとも楽しく充実していた年月でした。

第一歌集『まぼろしの椅子』では、「^{ならかいこ}奈良回顧」という章を設け、^{しがなおや}志賀直哉邸近くを通った時のことや、ピアノの演奏会で注目を集めた時のことなど、奈良や青春時代を歌に詠んでいます。

また大宮に住んでからも、機会を見ては奈良を訪れていたようです。旅することにあまり積極的ではなかった民子ですが、寺や仏と出会った彼の地には、特別な思い入れがあったのかもしれない。

62歳の時に刊行した^{いんど}『印度の果実』でも、再び奈良を訪れたいという心境を想わせる歌が見られますが、晩年になるにつれ、民子の体は不調が続くようになり、旅に出ることも難しくなっていました。それだけに懐かしい奈良への思いが民子の心に募っていたのかもしれない。



「奈良女子高等師範学校時代の民子」(No.6)

後列右から2人目

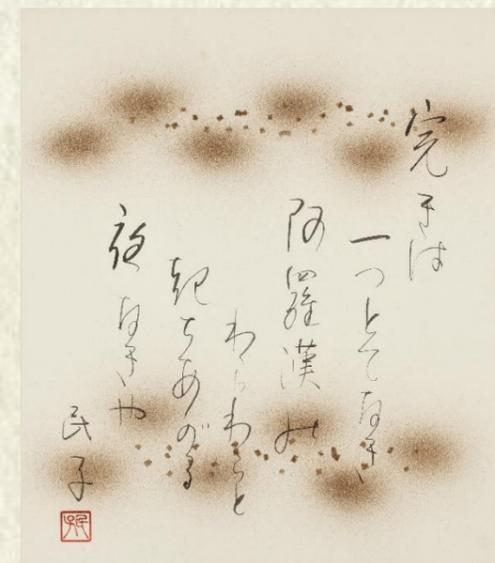
3 民子の寺巡り

大宮に来てからの民子は、さいたま市内の寺院もいくつか歌の題材にしており、かつて^{しゆくほうあと}宿坊跡を借りて住んでいた^{じょうこくじ}浄国寺のことも詠んでいます。

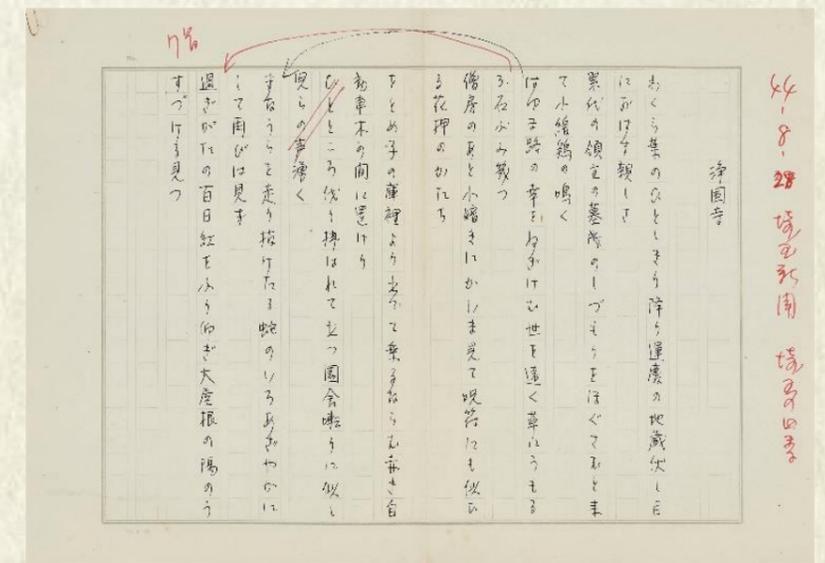
これらの歌は穏やかな内容のものがほとんどですが、民子の詠む仏は、不安や欠落感の象徴としても表されているようです。風化によって欠落を抱えた^{あらかん}阿羅漢の夢を描いた歌は、民子の代表作のひとつとされています。

多くの仏に出会うために鎌倉の古刹を訪れたことがエッセイに書かれ、^{うすきまがいぶつ}臼杵磨崖仏(大分県)を見に行った時の写真なども残されています。

また、民子は自宅の中に好んで仏の絵や写真を飾っていました。勤務以外は、自宅で歌を詠むことをはじめ、自歌の^{すいこう}推敲や^{てんさく}依頼された添削に専念していた民子にとって、好きな仏に囲まれた空間は心地よかったのかもしれない。



自筆色紙「完子は 一つとてなき 阿羅漢の
わらわらと起ち あがる夜なきや」(No.8)



自筆原稿「累代の 領主の墓の しづもりを
ほぐさむと来て小綬鶏の鳴く」(No.9)